

Sler/Nler 訪問 スターネットがテレビ会議多地点接続の新サービス マルチ接続とWebRTC対応で市場拡大

Nlerのスターネットが5月、テレビ会議多地点接続(MCU)の機能をクラウド型で提供する新サービスを開始した。WebRTCにも対応し、ビデオ会議の利用シーンを広げる狙いだ。

文◎坪田弘樹(本誌)

企業ネットワークの設計・構築、IPテレフォニー／テレビ会議、ユニファイドコミュニケーション(UC)の構築等を手がけるスターネットは5月20日、テレビ会議の多地点接続(MCU)機能をクラウド型で提供する新サービス「STAR-anyMeeting」を開始した。

このサービスの最大の特徴は、異なるメーカーのテレビ会議端末／UCクライアントを相互接続してマルチベンダーの多地点接続会議が行えることだ。Webブラウザ同士で音声・映像通信を行う新規格WebRTCもサポートしており、PCやスマートフォンからWebブラウザを使って会議に参加することもできる。

接続できる端末は、H.323準拠のテレビ会議、Microsoft Skype for Business(旧名称Lync)とCisco Jabber、そしてWebRTC対応ブラウ

ザを搭載したPC／スマートデバイスと幅広い。しかも、クラウドサービスであるため、MCU装置を購入する場合に比べて低コストにマルチベンダーのビデオ会議が実現できる。

スターネットは従来から、特定の製品に依存しないマルチベンダーのネットワーク／コミュニケーション環境の構築を売りにしてきた。「弊社の方針と合致するサービスであり、既存のお客様はコストをかけずにビデオ会議の利用シーンを広げていただける。PCやスマートフォンからも簡単に会議ができるようにすることで市場そのものを広げていきたい」と、技術本部ソリューション部・担当部長の橋爪正己氏は狙いを話す。

“複雑なこと”はクラウドへ

テレビ会議はすでに広く普及し、



スターネット
技術本部
ソリューション部
担当部長
橋爪正己氏

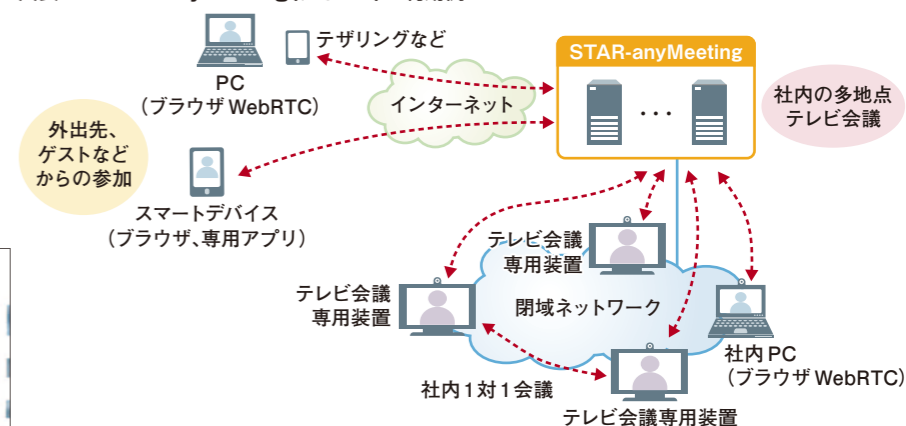
UCを導入する企業も増加している。また、スマートデバイスも急速にビジネスの現場に浸透しており、ビデオコミュニケーションの活用ニーズは着実に成長していくと考えられる。

だが、そこで問題となるのが、拡張に伴うコストとベンダー／製品間の相互接続性だ。テレビ会議が設置された会議室と外出先の社員のスマートフォンをつなぎたい、グループ会社や取引先ともビデオを活用したいというニーズがあっても、同時接続数を増やすためにMCUを拡張したり、異なる仕様の端末・ソフトウェアを相互接続することは簡単ではない。新たなMCU装置を購入したり、機種やバージョンごとの差分を考慮して設定をし



STAR-anyMeetingのデモの様子。高精細画像(HD)の送受信にももちろん対応している。PCやスマートフォンからはWebRTC対応ブラウザで会議に参加できる

図表2 STAR-anyMeeting(タイプC)の利用例



出典：スターネット

直したり、ネットワーク環境の見直しが必要な場合もある。

「コストがかかるために、そうした使い方を諦めていたお客様は多い」と橋爪氏は話す。この複雑でコストのかかる部分をクラウド側で吸収したこと、また、WebRTC対応によって多様なデバイスでビデオを活用できるようにしたことが、STAR-anyMeetingの画期的な点だ。橋爪氏は「特に、スマートデバイスのビデオ利用を広げるWebRTCの可能性に期待している」という。

スターネットはこのサービスを提供するための基盤として、Pexip社のソフトウェアMCU「Pexip Infinity」を採用している。従来型のMCUにはなかった特徴的な機能を備えており、前述のマルチベンダー接続やWebRTC対応もその1つだ。

もう1つ、Pexip Infinityの特徴であり、スターネットがサービスの売りにしようとしているのが「分散MCU機能」だ。MCUを複数のサーバーに分散配置して相互連携させる機能である。従来は、会議に参加する端末がすべて1カ所のMCUに接続する必要があったが、分散型MCUの場合は、

各端末が最寄りのサーバーに接続するため、帯域が節約できる。

図表1のように、日本国内と海外拠点との間で会議を行うような場合に、このメリットが威力を発揮する。

従来型MCUは、例えば中国と米国のすべての拠点から国内に設置されたMCUに接続する必要があった。STAR-anyMeetingでは、分散MCUを中国内のデータセンターに配置し、そこと日本国内の分散MCUを閉域網で接続、日本・中国の拠点はそれぞれの国内のMCUに接続すればよい。国際間の帯域を抑制できる。

スターネットは、グローバルにサービスを展開するデータセンター／クラウド事業者と協業してSTAR-anyMeetingを提供しており、顧客企業の要望に応じて分散MCUの設置拠点を増やしていく考えだ。まず、シンガポールへの展開を検討中という。

ビデオ活用を社外に広げる

マルチベンダー接続と分散配置という従来MCUにはない特徴的な機能によって、ユーザーはコストや作業負担を軽減しつつ、多様な場面でビデオ会

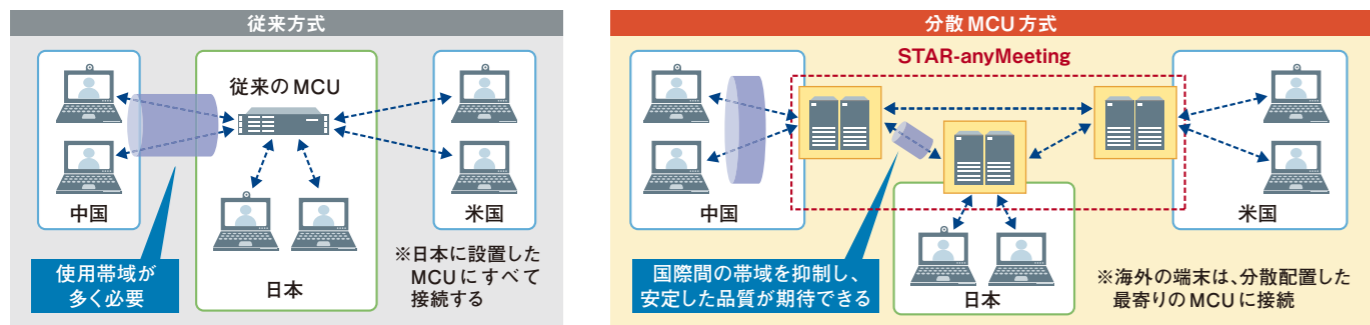
議を活用できるようになる。これまでビデオ会議は、社内のクローズな環境で利用されるものだったが、外出先の社員や取引先・顧客といった社外とのコミュニケーションに活用することで、その価値をさらに高めることができる。

ユーザーが目的に応じて柔軟な使い方ができるよう、スターネットではサービスプランも複数用意している。インターネット接続で利用するサーバー共有型の「タイプA」、閉域網接続で利用するサーバー専用型の「タイプC」を提供しており、中間モデルと言える「タイプB」(閉域接続・サーバー共有)も準備中だ。

なお、タイプC/Bはインターネットからのアクセスも可能なため、図表2のような使い方もできる。既存のテレビ会議とSTAR-anyMeetingを接続して低コストに多地点接続会議を行い、さらにインターネットアクセスで外出先の社員やゲストを参加させることも簡単にできるようになる。

橋爪氏は「年間売上1億円程度を目指している」と話す。既存のテレビ会議／UCビジネスとの組み合わせによる相乗効果も期待できそうだ。

図表1 分散MCU方式の利点



出典：スターネット